「村上龍」論

芝本絢子

私は村上龍の『限りなく透明に近いブルー』を十九歳の時に初めて呼んだ。そのときの衝撃を私は今でも覚えている。暴力とセックスとドラッグに満ちた世界だった。

しかし、そんな無秩序な中でも、清潔感が漂い不快感を感じなかった。だが、何がそうさせるのかは一読しただけでは分からなかった。

そこで、その謎を解くため大学の卒業論文で村上龍の作品を取り上げた。卒業論文では、私が初めに感じた清潔感の理由を考察した。そして『限りなく透明に近いブルー』では、純粋無垢な目で作品世界を描いているという結論に達した。

しかし、村上龍の作品を読めば読むほど、その他にも色々な謎が深まった。

今回取り上げた、「出身地」と「境界線」と「混血問題」と「人種」についてもその一つである。これらが他の作家と比べて作品中に頻繁に描写されることに疑問を持った。頻繁に描写されるからには意味があると感じた。

最初はそんな不確かな予想から小論を書こうと決意した。資料を作成するにあたって、『村上龍自選小説集』全八巻の中の二十七作品から、「出身地」と「境界線」と「混血」と「人種」の描写の箇所をすべて抜き出し、表にまと

めた。そこから何が見えてくるか、そしてどのような効果を狙ってこのような描写方法をしたのかをこの小論では、考察していきたいと思った。

第一章では村上龍の「出身地」に対する考え方を考察した。村上龍は「基地の町」に育ち、そこで自分の価値観を見につけた。それは、戦争に負けた敗者としての日本人という立場と勝者であるアメリカ人の立場の明らかな違いである。「基地の町」はそのはっきりとした立場の違いを認識せざるを得ない場所であった。

しかし、その状態を村上龍は否定したのではない。龍は、戦争によって作られた敗者と勝者という立場を現実のものとして受け入れ、許容したのだ。

日本国内では戦争に負けたが、アメリカに占領されたという感覚はなかったし、負けたという感覚すら、戦後時間がたつに薄れていった。そんな中で、龍は戦後何年たっても被支配の側で少年時代う過し、この状況こそが、現実の問題をリアルに露出させている場所として認識していたのだ。

問題を隠蔽することなく現実を許容する姿というのは、処女作『限りなく透明に近いブルー』からも伺える。

「基地の町」で育つことによって培われたこの感覚は、作品に影響しているといえる。龍が「基地の町」という状況について、特別な思いを持っていたのは、作品の中に「基地の町」という言葉が、数多く出てくることからも分かる。

このように「基地の町」という特別な状況で育ち、影響を受けた村上龍は、生まれ育った環境が、人間形成において大きな影響を与えると考えていたといえる。

そして、人物描写をする際に、頻繁に登場人物の出身地を明らかにするという描写方法をとることになるのである。

また第二章第二節では、村上龍に影響を与えた「基地の町」というのは、日本という島国の中でありながら、国と国との境界領域という性質を持っているという側面から検証することにした。

作品中で多く描写される「・・・と・・・の境」という描写を一つずつ検証してみた結果、「基地の町」と同質の性質を持った描写がなされていることが分かった。

それは、戦争に負けた現実を人々が忘れ去っていく中、いつまでも被占領国として暮らさなければいけない基地の町という性質である。村上龍が描く境界領域は、人々から忘れ去られた場所や、暗い過去を持つ場所、または、暴力的な場所として描かれているのである。

しかし、そのような場所である「基地の町」を村上龍は悲観的に見ているわけではない。それは、混血問題について書いてている描写を見ると分かる。

混血児を生み出す社会環境は、戦争や侵略や貧困からくる売春として描いているが、生れてきた混血児達は決して劣位には描かれていない。容姿や社会的立場や身体能力といった様々な側面で、優位に描かれているのである。

これは、生物学的に優位としているのではなく、国や人種の枠を超えた人間という形で境界領域を突破した者として、「基地の町」で戦争の勝者と敗者という現実を見てきた村上龍にとっての、一つの憧れの存在としているといえるのである。

そして、そのような立場から村上龍は、日本人の性質に関して、対談や作品において追及している。

村上龍は日本人として、また日本の外の世界を目の当たりにして成長してきた者として、日本人の共同体意識の強さについて、危機感を感じているのである。外部の存在を認識することなく、近代においても払拭しきれない閉鎖性

は、現代の国際化社会において、取り残されるという危機を感じているのだ。

また、その現実は、閉塞された空間の中では、自覚することができず、それを考えるには、常に外国という外部の存在を意識する必要があると、龍は考えているのである。

確かに、現代においても日本人の外部との接触の機会の少なさというものは、大陸という地続きの状態で他の国と国境を接する国と比べれば、明らかに違うであろう。意識の中においても、やはり、国際化が順調に進んでいるとは思えない状況である。

この危機感を伝えるために、村上龍は外部の存在として国籍や人種を作品の中で多用するのだ。つまり、他の人種を表現することで、日本人そのものを見つめなおし、認識する作業を行っているといえる。

そして、このように、日本人は世界を知る必要があると訴える村上龍の姿勢は、境界領域という性質を持った基地の町で育ったという原体験からくるものであり、またそれは、混血の描写からも見られるように、国籍を脱却した人間の優位性を訴えるものである。

このように世界的な見地から人間を見つめ、外部へと自由を求める意識というのは、国際社会に取り残されようとする日本人の危機意識の無さへの啓発なのであり、それを訴えるために、村上龍は、作品において数々の外部としての人種を描くのである。

このようにして、小論では、村上龍き作品における特徴的な描写方法を検証してきた。

最初は出身地や人種等の描写が頻出することに疑問を持ったというだけだったが、これらの表現を『村上龍自選小説集』全八巻からすべてピックアップしてみると、様々なことが分かった。しかし、ピックアップした大量の資料を

細かく一つずつ検証するまでには到らず、全体の大きな流れとしての結論となった。ただ、今回作った資料は今回の小論で出た結論以外のことも検証できるものであると思う。作品別や時代別に傾向を比較することもできるし、数値的に検証することも可能だ。これらのことは、今後の課題としたい。